



現代の中日国際結婚に関する社会学的研究

胡, 源源

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6796号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006796>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

現代の中日国際結婚に関する社会学的研究

氏名：胡 源源

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 藤井勝 教授
(副) 平井晶子 准教授
(副) 釜谷武志 教授

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

本研究は「南北型」の中日国際結婚の中国人妻を事例として、「南北型」の国際結婚の外国人妻の生活世界を明瞭することを課題とした。各章の内容をまとめると以下の通りである。

第一章は国際移動の視点から中国人妻が日本に結婚移住のプロセスを分析した。これまでプッシュアップの国際移動の枠組みを放棄し、国際移動のシステム論を借用してミクロの構造とミクロの個人の真ん中にあるメゾの移住媒介に注目し、国際結婚の移住プロセスを検討した。中国人妻は日本への結婚移住過程には「認知の媒介」、「推進の媒介」、「道具の媒介」という三つの移住媒介が介在する。この三つの媒介が相互連動して初めて結婚移住が成立できる。現時点で、東北地区において海外への移住が「大衆化」する傾向となっている。特に、近隣の日本、韓国への移住が盛んである。地元で移住のルートが多数開発され、その中で、結婚がジェンダー化された移住の近道であるといち早く認知された。地元で海外移住の「大衆化」の傾向は、ミクロの移住者に移住の意志を生成させることに多大に働いた。そして、結婚移住の道を知った女性に対して、結婚移住の道に踏み込ませることを大きく後押ししたのは「促進の媒介」である。この「促進の媒介」とは「人情社会」である中国における個人の「コネ」である。「コネ」は移住過程で二つの役割がある。一つ目は、連結である。ミクロの移住者を道具の媒介と連結させ、移住者を信頼できる道具の媒介の前に導く。二つ目は、推進である。促進の媒介は結婚移住者の結婚意志を強固する。最後、移住を実現する決め手は、「道具の媒介」——斡旋業者である。中日国際結婚に介在する道具の媒介には、これまでの先行研究で提示した「報酬型」や「商業型」の類型に還元できない「ミックス型」という新しいタイプの媒介である。そして、具体的な斡旋プロセスにおいて、中国人妻の嫁ぎ先は支払われた手数料によって決められている。金額が高ければ高いほど、良い条件の嫁ぎ先になる。

第二章は中国人妻と夫側親族の関係への考察を通して、中国人妻が家庭内での地位を分析した。結論からいうと、これまで先行研究で論じられた「弱い嫁」の姿が見られず、強い態勢を示している中国人妻の姿が現れた。夫側の親族、特に姑と舅は中国人妻への「歓迎」「遠慮」「譲歩」という三つの態度を示している。いずれにしても手ぐすねを引いて待っている元気な姑の姿が見られない。家意識が強い農村部においては、家事や老親への世話といった嫁の役割が大きく期待されるはずだったが、実際には姑と舅の立場から、中国人妻の役割を過度に求めることはなく、優しく扱う。中国人妻が家で低く位置付けられなかった理由は以下の数点から考えられる。第一、戦後、「家」制度が廃止され、家父長権が大幅に縮小するにつれ、嫁の地位も高められるようになった。このような背景のもとで、中国人妻たちも日本人女性と同じく嫁として地位が高くなっている。夫側の家族からの圧力が少なくなっていると考えられる。第二、地方の若い日本人女性たちは都市部に流出し、男女の性別のバランスが崩れている農村では「嫁飢饉」の現象が久しい。嫁不足の農村・地方では、

日本人女性の代わりに、中年になった息子と結婚してくれる中国人妻が家族にとってありがたい存在である。せっかく来た中国人嫁に圧力を加えず、安心して暮らせるために、夫の家族から優しく扱われる。第三、中国で男女平等のイデオロギーをうけて社会化された中国人妻は、その価値観をそのまま日本に持ち込み、家族で誰にも左右されたくない姿勢で、家族で積極的に自分の居場所を作る。第四、周りに中国人妻同士のネットワークが存在し、特に強硬な「先輩」の例をまね、家庭の中で強い態勢を構築する。

第三章は中国人妻のネットワークへの解明を通して、彼女たちと地域社会との連結を検討した。聞き取り調査とアンケート調査のデータから日本の農村・地方に結婚移住した中国人妻は地域社会で孤立的に存在するのではなく、社会的なネットワークを構築できた。しかも、中国人妻同士という同質性の高いネットワークである。ただ、①序列化されることへの拒否、②世代間のギャップ、③中国国内の地域文化の対峙の再現などの原因で中国人妻の間で互助組織やフォーマルな互助グループが形成されなかった。また、世代別で中国人妻のネットワークの特徴を見ると、「ベテラン世代」の中国人妻の早期のネットワークの特徴は「同国人単一型」であった。日本の生活に慣れるに伴い、生活の独立性が高くなるにつれて、中国人と日本人の間にどちらに力点をおいているのかはっきりと分かれぬ「バランス型」のネットワークになっている。一方、「適応世代」の中国人妻は、同国人同士のネットワークは自分と親しい関係を持つ「小グループ」の中国人妻に限定している。「新米世代」と濃密な関係を構築していない。日本人とも「弱い紐帯」を保っている。第三国出身の妻と出会う場所があるが、各自のネットワークの存在で、親密な関係が構築できなかった。総じて、「適応世代」の中国人妻は「同国人中心型」のネットワークを作っている。そして、「新米世代」の中国人妻は同国人同士への依拠性が高い。特に「適応世代」に多大な助けを求める。中国人妻同士のネットワーク作りに積極的であるが、しかし、就労は日常の私的時間が多大に取られることによって中国人妻と出会うチャンスが減られ、結局同じように「小グループ」の友人圏になっている。中国人妻なりの喫緊課題が多く、日本人との交際に限界が顕著である。第三国出身者と出会う場所があるが、各自のネットワークを持つ以外に、「新米世代」にとって、文化の壁、特に言語のハードルが高い。「新米世代」は「同国人単一型」のネットワークになっている。まとめると、来日した中国人妻のネットワークの特徴は様ではない。「ベテラン世代」はより個人を中心に原子化の社会関係であると対照に、「適応世代」と「新米世代」は日本人より中国人妻の世界に偏っている。三つの世代にとって第三国出身者がともに「同質な他者」の存在である。

第四章は国際移民のトランスナショナルな視点を取り入れて中国人妻と母国のつながりを論じた。親族関係の資源性から出発し、経済機能、再生産機能、情報機能という三つの側面から来日した中国人妻と母国親族の相互作用を呈示した。経済機能において、来日した中国人妻は、海外に移住したフィリピン女性のように定期的に送金せず、状況に応じて送金活動をしているだけである。しかも、送金は従来に捉えられた単純な経済救済という古典的な意味ではなく、中国人妻の送金は個人のニーズを満足させる生活様式の転換という現代の

送金意味が強い。再生産機能においては、中日の育児規範の違い、あるいは高齢で日本人夫の親族に期待できないなどの理由から、出産や子育てにおいては母国の親族が中国人妻に多大な支援を与える。他方、母国の親族が要ケアになる場合、中国人妻は帰国し、親のケアをして娘の役割を果たしている。情報の機能において、中国人妻は帰国や母国の親族とのやり取りを通じて、お互いに情報交換をする。中日国際結婚における親族機能のトランスナショナルな連続性は「血縁重視」、「孝」などの中国の伝統文化が作用している結果である。そして、1979年に「一人っ子政策」の実施によってもたらされた中国の家族変動とも関わっている。さらに、日本の厳しい入国管理政策に代表されている構造上の制限と中国人妻が日本社会で調達できる資源の欠如というミクロの「現実性」の呈示である。

第五章は視点が日本から中国に変わって、中国人女性の海外移住が彼女たちの出身地域にもたらした影響を論じた。現在、女性を多大に送り出す東北地区ではベトナムなど東南アジアからの外国人妻が流入している。筆者は本研究でそれを「東北型」の国際結婚であると名付けた。この「東北型」の国際結婚は以下の三点によって成立した。第一、中国で年齢層、階層を問わない女性の海外移住の常態化・固定化によって人口構造の歪みや女性への信用危機が生じた。それは地元の結婚市場の外国人妻受容に空間を作り出した。第二、女性の大量不在は地元の配偶者選択の基準の変容を牽引した。本来、結婚において男性に要求した経済要素以外、女性に課されたジェンダー要素も男性に対して大きく作用するようになった。第三、東北地区の独特な移民文化は女性の国際的な出入りに寛容な環境を提供している。そして、結婚市場で排除され、やむを得ずグローバルな結婚市場で相手を探す家族は、外国人嫁がいつか家から逃げ出すという先入観を持ち、それを防止するために中国の親は家族関係や「グローバルな世帯保持」において主体性を発揮して戦略を講じている。具体的に、外国人妻が嫁としての役割遂行に失敗した際に、中国の親は一家の嫁より息子の妻であるという役割認識が先行したり、はっきりと離婚を申し出る嫁に意識的に権威を後退させて家長の顔を隠したり、借金してまで送金に協力したりすると見られる。

第六章は日本だけでなく、韓国・台湾に結婚移住した中国人妻の生活と比較しながら中日国際結婚の特徴を見出す。具体的に結婚移住プロセス、夫婦関係、親族関係、中国とのつながりなどの面から比較を行った。第一に、中国人妻の結婚のプロセスについて、親族や友人の紹介を通して、中国で外国人夫と初対面で、そして結婚と同時に、あるいは結婚直後に海外に移住することが東アジアにおける中国人妻の越境結婚の典型的なパターンである。中日国際結婚では、出会い場所について、中国が主流であるが、日本での出会いも一部として存在している。知り合い契機において、友人や親族の紹介がメインで、幹旋会社の仲介も重要な一部である。中日国際結婚と中台、中韓結婚と比べると商業性質が濃い。中国人妻の大多数が結婚と同時に、また結婚直後來日した。また、結婚式について、中日と中台結婚は中国で行うのが大多数であり、中韓結婚が韓国で式を行うのが大多数である。第二、中国人妻と外国人夫の夫婦関係について、各国・地域の半数以上の外国人夫は家事・育児に参加している。家事・育児参加において夫が協力的である。その中で、日本人夫の順位が一番下で

ある。各国・地域の妻たちは結婚生活に肯定的に評価している。漢族妻の離婚意識がほかの妻より相対的に高い。全体の離婚理由として夫の家族・親族および地域社会より夫婦内部にある。それに夫婦内部では夫の経済力より性格を代表する個人のパーソナリティや態度・考え方を代表する内面化された文化のほうがより夫婦葛藤となりやすい。第三、夫側親族との関係について、居住関係では、中日、中台家族は同居が主流で、さらに、同居の中で「同居共財」が多数派である。中韓家族は別居が主流である。義理親の健康状態が一番悪いのが日本である。朝鮮族妻の義理親の健康状態が一番良い。義理親との会う頻度において、大多数の中国人妻、大陸妻、漢族妻は「毎日」に会う。大多数の朝鮮族妻は「毎週」に会う。親族との会う頻度において、中国妻と親族の会う頻度が相対的に低い。中国人妻の中で親族と「半年に1回以上」会うのが4割近くである。中国人妻、大陸妻、漢族妻と親族と会う頻度が義理親と会う頻度より低い。朝鮮族妻と夫側親族と会う頻度は義理親と会う頻度とあまり変わらない。義理親への支援において、「入浴」以外の項目で、「料理」、「掃除・洗濯」、「買い物」、「病院送迎」で中国人妻の頻度が一番高い。朝鮮族妻の頻度が最も低い。義理親との関係の評価において、総体的に円満している。第四、母国親族とのトランスナショナルな関係について、各国・地域の中国人妻は母国の親族と持続的な関係を保っていると見られる。中国人妻、大陸妻、漢族妻は帰国頻度が高く、滞在期間が「1週間～1か月」に集中している。それに対照に、朝鮮族妻は帰国頻度が相対的に低く、滞在期間も相対的に長い。また、出身家族や出身地域への支援について、いずれの国・地域に結婚移住した大多数の妻は支援していないことが確認できた。しかも、各国・地域に移住した妻で出身家族に支援しない割合と比べると、出身地域に支援しない中国人妻の割合が高い。一方、行われた支援の中で送金が最も行われた項目である。各国・地域の妻の送金の割合は以下のようなものである。中国人妻の2割、大陸妻1割未満、漢族妻1割、朝鮮族妻の2割未満である。そして、出身地域の寄付先では各国・地域に少し異なるところがある。中国人妻の主な寄付先は学校、大陸妻の主な寄付先は学校と行事や祭礼、漢族妻や朝鮮族の主な寄付先は一族である。

論文審査の結果の要旨

氏 名	胡 源 源
論 文 題 目	現代の中日国際結婚に関する社会学的研究

要 旨

本論文は、今日の東アジアに展開する国際結婚、とくに「南北型」の国際結婚を社会学の立場から解明したものである。このタイプの結婚は、経済のグローバル化によって進展する国・地域間の中心—周辺という垂直構造と深く結びついている。日本では「ムラの国際結婚」として出発し、とくに農村部の男性が結婚難のために、アジアの途上国の女性に配偶者を求める社会現象を意味してきたが、「中心」社会内部にあっても、農村や地方だけでなく、次第に大都市の中下層が「周辺」化されるため、「ムラの国際結婚」は今や都市社会の問題でもある。この国際結婚によって男性（夫）は伴侶の獲得、家族の後継者の確保、さらに親の扶養が可能となり、女性（妻）は出身社会と比べて相対的に豊かな生活の獲得、出身家族に対する送金等の経済的支援が可能になる。つまり男性側には再生産領域の安定化を、女性側には出身家族の世帯保持の安定化をもたらす。さらに双方の地域社会にもさまざまな影響を及ぼす。

本論文は、そのなかの中日国際結婚、つまり中国人女性と日本人男性の結婚を主に論じている。そして実証的な分析のために、兵庫県T地域に居住する中国人妻を継続的に調査するとともに、これら女性の主な出身地である中国東北部などでも現地調査を実施している。さらに自身が参加した国際結婚比較アンケート調査のデータも活用している。東アジアでは、中国は東南アジア諸国と並んで国際結婚女性の重要な供給源であるので、中日国際結婚によって「南北型」の国際結婚を明らかにすることは、東アジアの国際結婚研究全体の発展にも大いに貢献できる。

本論文は、先行研究の整理や課題の提示を行った序章、そして続く第1章～第6章、全体のまとめである終章から構成されているので、以下では第1章から第6章を中心に取り上げる。

第1章では、日本への結婚移住女性の重要な供給源である中国東北部の女性が、国際結婚に到達するプロセスを解明している。そのために先行研究の検討によって「メソ」レベルの分析を重視し、女性を国際結婚へと導く3つの「媒介」という視点を導入している。そして、①認知の媒介では、日本への結婚移住が実現可能であるという認知が中国東北部女性の間で「大衆化」されていること、②促進の媒介では、中国固有の社会的ネットワークによって、中国に住む国際結婚希望の女性が日本人と結婚した中国人妻から日本や国際結婚の詳しい情報を獲得できること、③道具の媒介では、国際結婚を実行に移すために斡旋者（個人と業者）が介在し、それらは圧倒的に「商業型」や「ミックス型」であるため市場原理が著しく作用していることを明らかにしている。独創性のあるアプローチにより、従来のプッシュアップ分析等では十分に把握できない結婚移住のプロセスを浮き彫りにしている点は大いに評価できる。

第2章では、以上のプロセスを経て結婚移住した中国人妻が、日本の地方社会で営む生活について解明している。事例は兵庫県内のT地域であり、中国人妻へのインタビュー調査を通じて、彼女たちの行動や意識、また夫の父母である舅姑との関係などを詳細に分析している。それを通じて、中国人妻は家族内で自分の地位を高め、居場所を作れるように行動する姿とともに、日本人の義父母は、伝統的な家規範の弱まりや、結婚難のなかで得た息子の嫁を失いたくないという意識の下、中国人妻に厳しく接することができない現実を描き出している。また日本語教室などへの参加を通じて中国人妻間のネットワークが形成され、その中で彼女たちの孤立が弱められ、地位を高める意識が強められると論じている。日本の農村・地方の嫁いた外国人妻たちは日本の伝統的な家規範・秩序の中で弱い立場に置かれるといった、紋切り型の分析とは異なる論点を提示していることは大変興味深い。

第3章では、同じく兵庫県T地域を事例として、中国人妻のネットワークをインタビュー調査等によって深く解明

主査記載 氏名・印	藤 井 勝
--------------	-------

している。そして中国人妻は孤立することなくネットワークを形成するが、その相手は主に中国人妻や日本人であり、同じ中国人であっても研修生、さらに中国人妻以外の国際結婚女性は相手にならないと断じている。また中国人妻の間のネットワークは、フィリピン妻の場合のような強い相互扶助関係ではなく、お互いがある程度距離をもつことを、中国人固有の序列意識や対人関係観の側から説明している。さらに中国人妻を「ベテラン世代」・「適応世代」・「新米世代」に分けて比較し、在留期間の長期化とともに同じ中国人妻とのネットワークは弱まるが、職場や学校で「その場限り」だった日本人との間には次第に「弱い紐帯」が発展することを明らかにしている。東南アジア出身の妻とは異なる中国人妻のネットワークや日本社会への定着といったテーマを丁寧に掘り下げ、成果を上げている。

第4章では、中国人妻が出身地の親族（特に親）と結ぶ関係について、兵庫県内T地域および中国東北部のH県での現地調査によって解明している。その関係を3つの機能（経済、再生産、情報）にわけて分析し、送金は親たちの貧しい生活を支援するためではなく、むしろ親たちにより豊かな生活をもたらすことを目的とすること、日本での中国人妻の育児に実家の親がさまざまなかたちで関与すること、さらに中国人妻と親の間で日中に関する情報がさまざまに交換されるため、民間レベルで日中認識が深まることなどを明らかにしている。そして、こうした親族関係が存続する要因として、伝統的な「孝」意識の存続、一人っ子政策下における娘の親族扶養意識の高まり、さらに中国人妻に課された様々な制約によって中国の親に依存せざるを得ない「現実」などを捉えている。「グローバルな世帯保持」を基底において展開する、国境を越えた親子関係の社会的実相を十分に析出していると評価できる。

第5章では、中国東北部で増加する国際結婚女性の受け入れの特質を、現地調査にもとづいて解明している。中国では国境地帯において同じ「エスニック集団内の結婚」として生じる国際結婚が従来から存在したが、近年では、一人っ子政策や沿岸部への大量人口移動などを背景に「異民族業者斡旋婚」と呼ばれる国際結婚が増加し、東北部でも同種の結婚がみられると論じる。そして中国東北部H県の事例分析によって、女性が日本などへ数多く結婚移住して「妻不足」が生じるという固有の要因のもとで、同一地域社会内で国際結婚による女性の流出と流入（東南アジア、とくにベトナムから）が併存する様態を考察している。さらに外国人妻と、彼女らを受け入れる家族（特に舅姑）の関係の分析を通じて、伝統的な中国農村家族の形が揺らぐ側面を捉えている。国際結婚において中国が「南」と「北」の両面を有することを実証的に示したことは、国際結婚研究にとって大きなインパクトとなる。

第6章では、兵庫県T地域（日本）、忠清南道内の2地域（韓国）、K県（台湾）で実施された、地方における国際結婚アンケート調査データを利用して、それぞれの地方社会における中国人妻の結婚のあり方、そしてそのなかでの中日国際結婚の特質を解明している。具体的には結婚プロセス、夫婦関係、夫側親族との関係、出身地の親族との関係などに焦点をあてて考察し、中日国際結婚では、結婚プロセスの商業化（市場化）傾向がより顕著であること、家事・育児への夫の参加率が相対的に高いこと、義父母との同居傾向が強いこと、夫婦の年齢が相対的に高いために義父母の生活支援・介護問題がより切実であること（ただし施設介護に委ねる傾向も顕著）などを、さらに中韓・中台結婚にも共通する点として、中国人妻は実家への帰国頻度は高いが経済的支援は顕著でないことなどを提示している。中国人妻の問題を国・地域間で比較検討した研究はほとんど存在しないので、貴重な成果と言える。

以上の審査結果にもとづき、本審査委員会は論文提出者である胡源源が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと結論するに至った。

審査委員

区分	職名	氏 名	区分	職名	氏 名
主査	教授	藤 井 勝	副査	教授	釜 谷 武 志
副査	教授	白 鳥 義 彦	副査	准教授	平 井 晶 子
副査	准教授	佐 々 木 祐			